

まいいぶん 愛知

no.72

県内遺構遺物集成：内傾口縁土器と厚口鉢

洲浜（東張り出し部）



磯浜（西張り出し部）



名古屋城三の丸遺跡の庭園遺構

国立名古屋病院地点の発掘調査で、江戸時代の「御屋形」に伴う庭園の池が発見されました。池の構造は、南西部の導水部から磯浜（西張り出し部）や洲浜（東張り出し部）を経て、北東部に水が流れていく形に復元され、池底は黄色粘土を貼り付けた上に玉石が敷かれていました。北側に想定される書院などから眺める池泉庭園の池と考えられます。

（詳細は4頁）

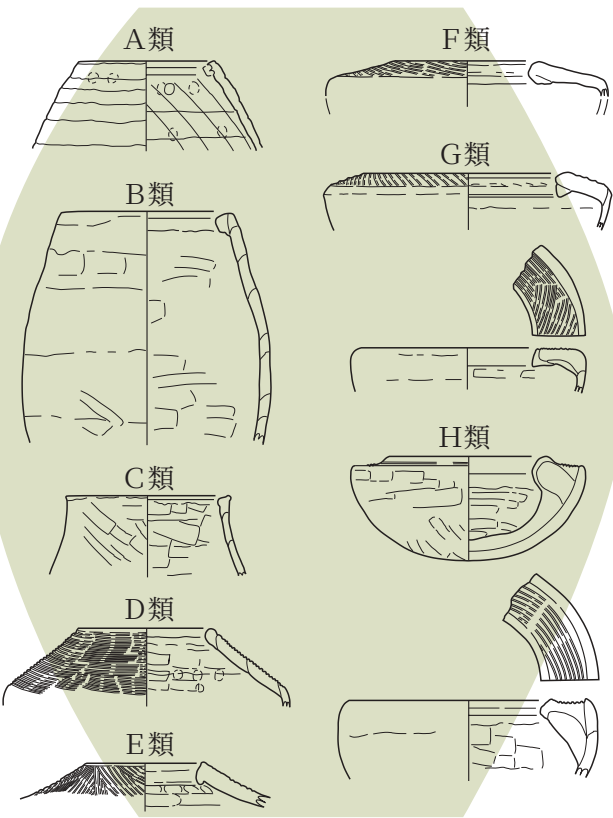
内傾口縁土器と厚口鉢

はじめに

弥生時代前期から中期前葉にかけて県内を中心に、独自の器形をした容器がある。ひとつは、洋酒の樽のような形をした「内傾口縁土器」、もうひとつは火鉢のような形をした「厚口鉢」である。弥生土器は貯蔵具である壺形土器、煮炊具である甕形土器など機能別に器種分化した土器として考えられている。ところが、内傾口縁土器と厚口鉢は、壺でも甕でもない独特の器形の土器。分布や消長、使用痕跡からその実態に迫ってみる。

1. 内傾口縁土器・厚口鉢とは？

まず、従来の研究を振り返ってみる。紅村弘は縄文時代晩期から弥生時代中期の土器を分類・編年するなかで、「厚口鉢」を条痕紋系土器の一器種として位置付けている（紅村 1956）。この時点では厚口鉢の特徴である「口縁が内折してこの部分が厚く作られ、上面に条痕又は直線を見る」と時期比定（中期初頭：続水神平式）を指摘するのみであった。つぎに、中村友博は厚口鉢とその系譜を指摘する中で、「内傾口縁土器」・「内折口縁土器」・「厚口鉢」の3者に分類、内傾口縁土器から厚口鉢への変遷を指摘した（中村 1987）。中村による体系化がなされ、分布が長野県に達することやこれらの土器に被熱痕があることも指摘されたことから、より研究は進展した。



内傾口縁土器・厚口鉢分類図（朝日遺跡）S=1:6

2. 内傾口縁土器・厚口鉢の実態

近年の資料増加から、中村の指摘した内傾口縁土器から厚口鉢への変遷がより具体的に捉えることができるようになった。特に、朝日遺跡における資料数は1遺跡の資料数では群を抜いている。そこで、朝日遺跡出土資料をもとに、分類し、時期の消長を考えてみる。

（1）分類

A～E類（内傾口縁土器）

A～C類：胴部最大径から緩やかに内傾し、口縁にいたる。全形は下ぶくれをなす。口縁端部は強くなで、面取りを行い、内面に突出する。器壁外面の調整は、未調整のものが多く、粘土紐の痕跡を残すものが多い、板ナデ調整を行うものもある。内面は板ナデをするものが多い。

A類は、胴部最大径から内湾しながら口縁にいたる。

B類は直線的、C類はやや口縁端部に反り返る。

D類：胴部最大径で屈折し、口縁部にいたる。胴部下半はケズリあるいはナデ調整で、上半と明確に異なる。

E類：D類より胴部最大径から口縁部にいたる長さが縮小する。これに伴い、内面未調整部分に粘土紐のつなぎ痕が明瞭に残り始める。胴部下半の器壁が薄くなる。

F～H類（厚口鉢）

F類：E類よりさらに胴部最大径から口縁部の高さが低くなり、全体に扁平化指向になる。

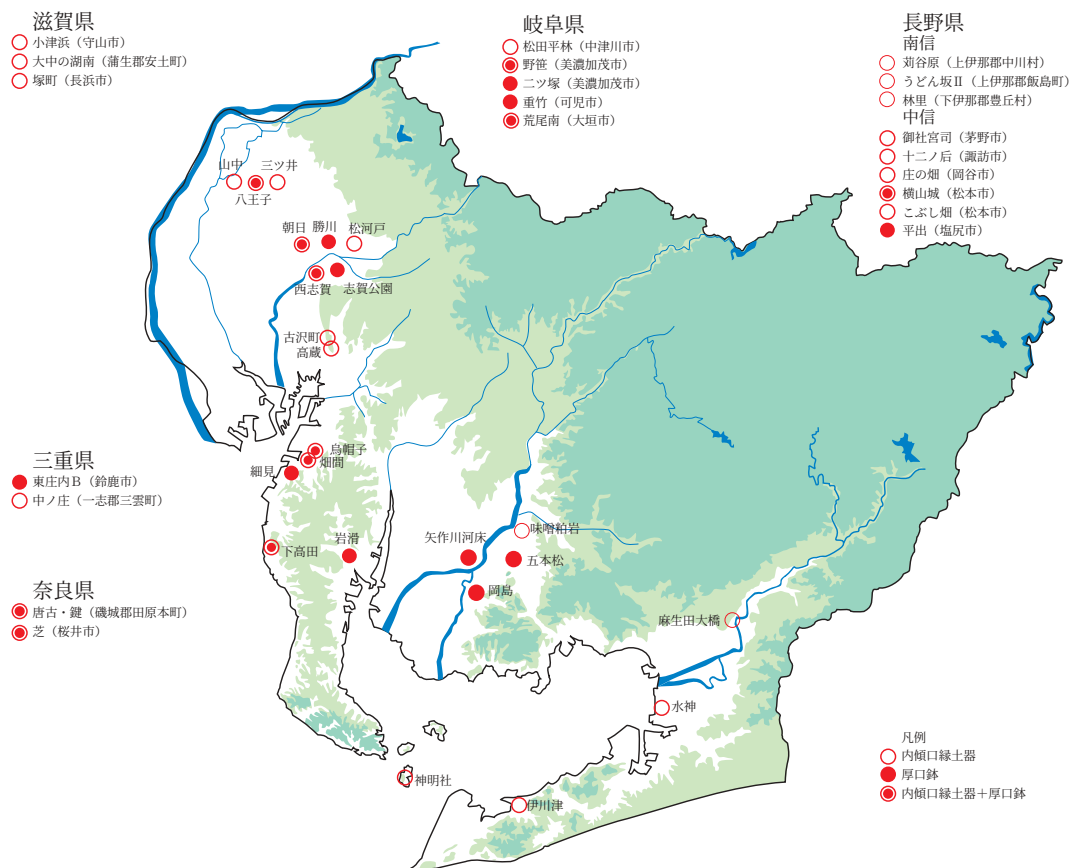
G類：胴部最大径から口縁部がほぼ水平に屈折し、長さもF類よりさらに短くなる。H類に比べ、口縁部はさほど厚くならない。

H類：G類に比べ、極端に口縁部が厚くなる。口縁から胴部最大径にいたる断面形は直角三角形に近い。

以上、概ねA類からH類への変遷が追える。中村による分類に従えば、D～F類は内折口縁土器が相当するが、器形全体を捉えられる資料が少ないため内傾口縁土器（F類は厚口鉢）に位置付け、内傾口縁土器から厚口鉢への過渡的現象として捉えた。

内傾口縁土器・厚口鉢の消長表

前期	I-1	古沢町 烏帽子
	I-2	↓ A類
	I-3	↓
	I-4	
	I-5	
	I-6	↓ B類 C類 D類
中期	II-1	↓ E類
	II-2	↓ F類
	II-3	↓ G類 H類



内傾口縁土器・厚口鉢出土遺跡分布図

(2) 時期

消長は、尾張第Ⅰ－Ⅱ様式に出現し、尾張第Ⅱ－Ⅲ様式に消滅する。すなわち、尾張平野に遠賀川系土器が定着する時期に始まり、細頸壺に代表される貝田町式の櫛描紋系土器の出現とともに消滅する。祖形は古沢町遺跡(名古屋市中区)・烏帽子遺跡(東海市)に求められる。深鉢形の器形、口縁部内面が粘土紐1本分突出し、尖底状をなす底部に特徴をもつ条痕紋系土器の一型式が、名古屋台地から知多半島西北岸の地域にみられる。

(3) 分布

伊勢湾周辺を中心に、当該期の遺跡には数点確認できる。さらに周辺地域として、唐古・鍵遺跡(奈良県)、小津浜遺跡(滋賀県)、長野県(中南信)まで広がっている。他地域への分布は、搬入品であることと、内陸部指向であることを指摘しておく。一方、愛知県内に目を戻すと、内傾口縁土器は県内各所で出土するものの、厚口鉢は東三河、特に豊川流域に出土しない。さらに、朝日遺跡や八王子遺跡など大規模集落では数十点以上出土する。県外の唐古・鍵遺跡、小津浜遺跡、御社宮司遺跡(長野県)でも同様である。

(4) 用途

内傾口縁土器・厚口鉢は、ほとんど例外なく被熱の痕跡をもつ。すなわち、煮炊具としてその用途を考えることが可能である。器壁の特徴から、外面調整は粘土紐の痕跡を残す一方で、内面は丁寧になでて仕上げる。肥厚した口縁部に対して胴部は薄くなる。さらに、完形品で

出土する事例はなく、底部の出土はほとんど知られていない。つまり、煮炊具として何度も使用する道具ではなく、一度使用したら使えなくなる用途が想定できる。

3. 塩つくりの土器の可能性

最近、畑間遺跡(東海市)から出土した弥生時代前期後半(尾張第Ⅰ－Ⅴ様式)の土器に、製塩土器の可能性を指摘する深鉢形土器がある。内傾口縁土器の祖形とした烏帽子遺跡の型式に類似し、同一型式であると考えられる。したがって、内傾口縁土器・厚口鉢も塩づくり土器としての可能性は十分にある。また、豊橋市さんまい貝塚(縄文晩期中葉)や大西貝塚(縄文晩期後葉)の外面に輪積痕を残す深鉢形土器は製塩土器として考えられている。つまり、縄文時代の終末段階から愛知県内で塩づくりの土器が始まっていたといえる。

特異な器形、搬入品として内陸部にもたらされる、被熱の痕跡、完形品がないといった事象を解決する糸口は土器の表面などに付着する珪藻の分析など自然科学的な手法を取り入れた検討が必要である。古代の製塩土器あるいは焼塩土器に類似する結果が見出せれば、弥生土器としては希少な用途が限定できる土器として注目できる。

(調査研究員 永井宏幸)

参考文献

- 紅村弘 1956.3「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代学研究』13 古代学研究会
- 中村友博 1987.11「5.3. 水神平式土器 B.a 内傾口縁の土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ 雄山閣

発掘調査速報 1 名古屋城三の丸遺跡 (名古屋市中区)



調査区全景

国立名古屋病院の看護婦養成所大型化整備に伴う発掘調査では、17世紀中頃から幕末までの「御屋形」に関連する遺構が確認されました。「御屋形」は藩主の一族・元藩主の側室等が居住した屋敷で、石組溝や庭園に伴う池、地下室、大型廃棄土坑などの遺構が発見されています。池SX02は約10m四方の大きさと深さは約1.2mを測り、周囲の壁は大きな穴が開いた部分や漆喰の壁が残った部分などがあり、本来は巨石を池の周りに配置しその隙間を漆喰壁で覆い尽くしたものと考えられます。

石による装飾が施された庭園に伴う池は、名古屋城二の丸庭園（名勝）などで類例が認められますが、名古屋城三の丸の武家屋敷ではこれまでの発掘調査で庭園遺構は見つかっておらず、今回初めてこうした庭園遺構が発見されたことは、御屋形が特別な存在であったことを示す貴重な事例となるでしょう。

(調査研究員 鈴木正貴)

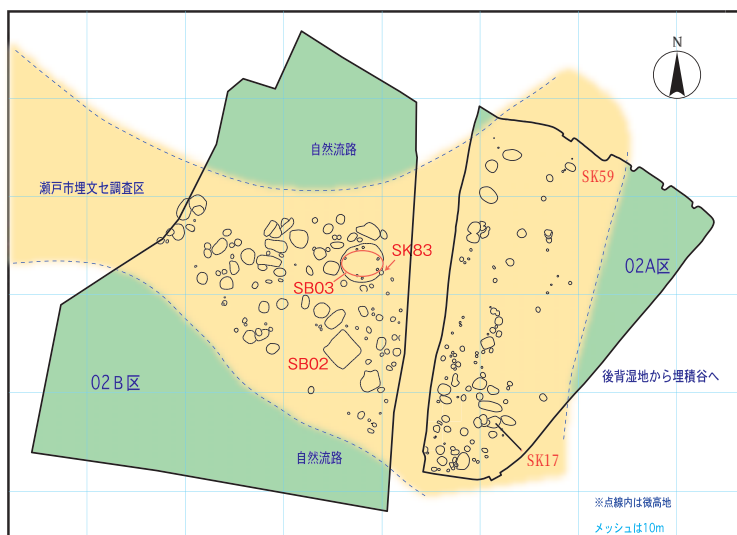
発掘調査速報 2 吉野遺跡 (瀬戸市屋戸町)

吉野遺跡では縄文時代中期から後期の集落が見つかりました。旧河道や谷が調査区の周りを囲み、約1,500m²の非常に狭い微高地のなかに、方形と円形の竪穴住居が各1棟、そのほか円形の土坑が数多く確認できました。注目できる遺構としては、径約3mの円形竪穴住居（SB03）があります。住居内と周辺から褐鉄鉱（ベンガラの原料）のかたまりやベンガラの付着した磨石や土器などが出土しました。このほか、河道の近くにふさわしく漁撈具と考えられる切目石錘が多数出土しています。

(調査研究員 永井宏幸)



調査区全景



SB03 検出状況

編集後記

印刷物による「まいぶん愛知」の刊行はこの号で終了します。今後は、メールによる情報発信を行ってゆくことになりました。

メールの送信を希望される方は、お手数ですが当センターのホームページよりご登録ください。個人宛でも送信いたします。

まいぶん愛知 no.72

発行 平成15年3月31日

編集 (財)愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017

愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田字野方 802-24

TEL.0567-67-4163 FAX.0567-67-3054

<http://www.maibun.com>

Email:doki@maibun.com